

## 2. 最近の難聴児早期発見の動向

張 道 行\* 田中 美郷\*

### 1. はじめに

平成2年10月より三歳児健康診査に聴覚検査が取り入れられたが、その成果を知る目的で、われわれの臨床を訪れた就学前のコミュニケーション障害児(特に難聴児)の最近の動向を調べ、若干の知見を得たので報告する。

### 2. 対象児

平成4年7月より5年5月末日までの間に、難聴または言語障害を心配して帝京大学医学部附属病院耳鼻科小児難聴言語外来を訪れた乳幼児(0～6歳)300名である。

### 3. 検 査

耳鼻科視診に加えて、精神発達検査(津守・稲毛)、聴力検査(BOA, CORテスト, 遊戯聴力検査, ピープショウテスト), 脳幹反応聴力検査などを施行した。

### 4. 検 査 成 績

#### 1) 診 断

表1に300名の診断名別に見た来院時(初診時)の年齢を示した。乳児期に訪れたもの41名, 1～2歳台で訪れたもの103名, 3歳児78名, 4～6歳児78名であった。これらのうち難聴があったものは感音難聴や、滲出性中耳炎による伝音

表1 コミュニケーション障害乳幼児の診断名と年齢

診 断 名	年 齢 (歳)					合 計
	乳 児	1	2	3	4～6	
感音難聴	34 (含1側性3)	29	24	24	30 (含1側性2)	141
滲出性中耳炎	2	2	0	3	9	16
精神遅滞	2	1	10	18	9	40
言語遅滞	0	1	5	5	12	23
精神遅滞+感音難聴	0	7	8	11 (含1側性1)	8	34
精神遅滞+滲出性中耳炎	0	1	1	4	1	7
言語遅滞+滲出性中耳炎	0	1	1	0	0	2
言語遅滞+感音難聴	0	0	1	0	2	3
感音難聴+滲出性中耳炎	0	1	2	2	3	8
異常なし	3	5	3	11	4	26
計	41	48	55	78	78	300

\*帝京大学医学部耳鼻咽喉科

難聴も含めて211名(70%)であった。難聴の無いもの89名中63名は精神遅滞か言語遅滞であり、26名には異常が認められなかった。難聴児中感音難聴は141名(うち6名は1側性)、感音難聴+滲出性中耳炎のみは16名であった。

## 2) 難聴の程度

表2は難聴の程度(4分法による平均聴力レベル)を年齢別に分類したものである。3歳未満で訪れたものは115名、このうち33名(約34%)は70dB以上であった。すなわち難聴が重いほど早期に訪れた傾向が見られた。

## 3) 最初に気付いた人

子供の異常に最初に気付いた人は表3に示す如く、多くは親であった(74%)。この傾向は従来との報告と変わらない。

表2 年齢別に見た難聴程度

年 齢	難 聴 の 程 度 (dB)				合 計
	21-40	41-70	71-90	90以上	
乳 児	6	9	6	15	36
1 歳	3	9	10	19	41
2	7	11	8	12	38
3	9	18	5	12	44
4-6	12	24	6	10	52
計	37	71	35	68	211

表3 最初に気付いた人

	乳 児	1歳6ヵ月	3歳児	3歳以上児	合 計(%)
両 親	35	78	57	55	223(74)
保健所、医師	13	11	18	17	59(20)
その他	4	5	3	6	18(6)

表4 来院経緯

紹 介 元	乳 児	1歳6ヵ月	3歳児	3歳以上児	合 計
保 健 所	19	39	36	17	111
保健所・他院	7	16	14	8	45
他 院	18	34	20	25	97
自主的来院	8	7	8	24	47
そ の 他	0	2	0	4	6
計	52	92	78	78	300

## 4) 来院経緯

表4にまとめた。来院児300名中保健所より紹介されたものは直接、間接含めて、乳児で26名(50%)、1~2歳児では55名(約60%)、3歳児では50名(64%)、3歳以上児で25名(32%)であった。

昭和63年から平成3年までの間に4年間に保健所より紹介された乳幼児は229名で、1年当たり57名であった(昨年度研究報告)。これに比べると今回の調査では保健所よりの紹介例は約3倍になったことになる。

## 5. 考 察

昭和63年より平成2年の4年間に、保健所からわれわれの臨床へ紹介されたコミュニケーション障害児は229名であった。このうち乳児は72名(約31%)、1歳6ヵ月児健診群は49名(約21%)、三歳児健診群は108名(約47%)であった。今回は保健所紹介例は、他院経由の間接的紹介も含めると156名であり、1年当たりの紹介例としては前回の約3倍に増加したことになる。これをもって直ちに3歳児聴覚検診の成果と見

ることはできないが、156名の内訳をみると、乳児26名(約17%)、1～2歳児55名(約35%)、3歳児50名(約32%)、3歳以上児25名(16%)であり、3歳以上児を3歳児に含めると75名(48%)となり、前回と比べて3歳児の比率は変わらないが、乳児の占める割合は少なく、1～2歳児の比率が高い。この理由についてはにわかに断定できないものの、三歳児健康診査に聴覚検査を導入したことによって、難聴児早期検出に対する関心が1歳6ヵ月児健診にも波及した可能性が考えられる。これについては今後さらに追求してみる必要がある。

## 6. ま と め

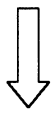
- 1) 保健所から紹介された年間の患者数は、過去4年間の年間平均受診数に比べて約3倍に増加した。これには3歳児聴覚検診の導入が関係している可能性がある。
- 2) 精密検査の結果は全受診者の70%以上に難聴が認められ、3歳未満児の難聴は79%に、また3歳および3歳以上の子供の難聴は62%に認められた。

## 文 献

- 1) 齊藤 宏, 廣田栄子, 田中美郷: 保健所から精密健診を依頼されたコミュニケーション障害児の検討, 平成4年度研究報告, 1993



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. はじめに

平成2年10月より三歳児健康診査に聴覚検査が取り入れられたが、その成果を知る目的で、われわれの臨床を訪れた就学前のコミュニケーション障害児(特に難聴児)の最近の動向を調べ、若干の知見を得たので報告する。